

『徒然草』 ―第三八段の研究―

The Study on the 38th Passage of *Tsurezuregusa* (Essays in Idleness)

土屋 博映

Hiroei TSUCHIYA

要 旨

第三八段については、紀要ですでに論文を発表済である。その論文で、第三八段が、『徒然草』にとって特別な意味を持つ段であることを論証した。本稿では、その論証の正しさをさらに補強する意味をこめて、異なった角度から論じることとする。いくつかの観点からアプローチするが、まずは評価語に注目する。「評価語」とは、形容詞・形容動詞を中心とした、本来感情語であり、また感情よりも評価に意味が転じている語を示す。簡潔にまとめれば、『徒然草』にとって本段は、俗世間での「名声」や「富」の否定を強く示す段、なのである。その否定性は、冒頭の一文「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ」の「愚かなれ」で、まず示される。この「愚か」は本書中に31例存在するが、第三八段には、7例が出現している。全体の4分の1ほどが本段に集中しているわけで、これは容易に無視するわけにはいかない数字と考えられる。そこで、まず本段の「愚か」について、その役割(価値)を調べ、論じ、次に本書中の他の「愚か」について、その役割を調べ論じた。それにより、『徒然草』全体の「愚か」の占める位置(役割)は、批判に値する人間について、「愚かなる人」と記し、必ずそれに対する「よき人」と比較対照する場合に用いる。また人生にかかわること、多くは「無常」について理解のない無知な行動・姿勢にたいして、述語として、「愚かなり」の形で用いる。第三八段の場合は後者で、「無常」について考えのない姿勢について「愚かなり」と厳しく批判していると、その役割(価値)を結論づけた。

一 全文

①名利に使はれて、しづかなる暇なく、一生を苦しむるこそ、1愚なれ。
 ②財多ければ身を守るにまどし。害をかひ、累を招く媒なり。身の後に金はして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。2愚かなる人の目をよるこぼしむる樂しみ、またあぢきなし。大きな事、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて3愚かなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵に投ぐべし。利にまどふは、すぐれて4愚かなる人なり。

③埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ、位高く、やん事なきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。5愚かにつたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位に登り、奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位にをり、時にあはずしてやみぬる、また多し。ひとえに高き官・位をのぞむも、6次に愚かなり。

④智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらつら思へば、誉を愛するは、人の聞きをよろこぶなり。誉むる人。そしる人、共に世に止まらず、伝へ聞かん人、またまたすみやかに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。誉はまた毀の本なり。身の後の名、残りてさらに益なし。是を願ふも、7次に愚かなり。

⑤ただし、しひて智をもとめ、賢を願ふ人のために言はば、智恵出でては偽あり。才能は煩惱の増長せるなり。伝へて聞き、学びて知るは、誠の智にあらず。いかなるをか智といふべき。可・不可は一条なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、功もなく、名もなし。誰

か知り、誰をか伝へん。これ、得を隠し、愚を守るにはあらず。本より賢愚・得失の境にをらざればなり。

⑥迷ひの心もちて名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。

※(注) 本文は日本古典文学全集による。番号、傍線は筆者による。

二 経緯

第三八段にはかなりなこだわりがある。それは、本書中、もつとも過激な段と考えられるからである。問題は、何故それほど過激でなければならぬのか、ということだ。それにかかわる既発表の論文は三つある。

1、『徒然草』研究の序章(跡見学園女子大学短期大学部紀要 第四十集)

2、『徒然草』研究―兼好の思想の由来―(本学文学部紀要 第四十二号)

3、『徒然草』研究―第三八段の価値(本学文学部紀要 第四十五号)

以上についてそれぞれの骨子とするところを述べておく。なお便宜上、1を「04紀要」、2を「09紀要」、3を「10紀要」と呼ぶことにする。

まずは「04紀要」から引用する。

「第三一段からは、感傷にひたっていない、ということから、ここから随筆家、兼好の本当の旅立ちが始まったと考えてよいと思われる。(中略)(序段が)「あやしうこそものぐるほしけれ」と、自分を見つめて、ある開き直りの境地を表しているとみれば、やはり従来の学説通り、第三〇段を書いた時点で、いったん筆を置き、しばらくの時間を隔てた上で、人生を客観的に見つめられるようになって、第三一段を記す前にお

かれたものと見るのが妥当であろう。」

これは第三八段（以後「本段」と呼ぶ）が直接かかわっているのではないのだが、第三一段から、兼好の（随筆家としての）本当の旅立ちが始まった、ということが関連する。

次に「09 紀要」を引用する。

「第三〇段はまさに人生に絶望した、極端に言えば、『遺書』ともいえるような内容である。彼はいったん死に、そして『復活』した。その原動力は何か。それは当然のことながら、彼が『徒然草』の執筆を中断していた間に経験したことである。その人生観を逆転させるほどの経験とは、何か。それは、書物から、としか考えられない。なぞを解く鍵は、『今の内裏』（第三二段）から「疎き人」（第三七段）までの五段にわたる段（これを仮に『復活』への『つなぎの段』と名づけておく）を経て記される、第三八段である。」

最後に「10 紀要」を引用する。

「このように『09 紀要』では、第三一段から第三七段を一部から二部への『つなぎの巻』ととらえ、第三八段を、『復活』の謎を解く段だと考えたのである。本稿では、以上二論文の後を受けて、『徒然草』の一部と二部の境界と、作者兼好の根底に存在する思考の変遷とを明らかにしたいと考えている。」

「注目すべきは、やはり第三八段である。全文ほとんどが、古典、それも中国の漢籍を典拠として論じられているのである。『才能は煩惱の増長せるなり。』は出典がなく、兼好独自の発想という点には注目しておく

たい。」

「第三一段からは、基本的に、抽象的な、無名の人間の意見を取りあげ、「をかし」「よし」と肯定している。そして、それこそが、本作品の意義だと確認し、第三八段を力強く記すに至った。兼好の内面の噴出である。第三八段で自分の内面にあふれるものを宣言し、自分の人生観が固まった以上、怖いものはない。言い換えれば、『何でも見てやろう』『何でも書いてやろう』である。ただし、この場合の『何でも』は、兼好の価値観に一致したものである。」

「第一部での中国や日本の古典よりかかる、懐古的・尚古的な、消極的な兼好が、現実を目を向け始めたのが、第三一段から第三七段までの『つなぎの段』である。そして、それを記す過程で、積極的に生きる自分を認め、第三八段で宣言、それを活かして第二部は展開していくことになったのだ。だから、形の上での第二部の始まりは第三一段だとしても、本当の意味での、内面的での、第二部の出発は、（第三八段を契機とした）第三九段からということが出来る。とにかく第三八段は、本作品にとって、もつとも重要な段の一つとして位置づけおこなうてはいけないのである。」

三 第三八段の検証

本段の過激さは①の冒頭の一文にあらわれている。

「名利に使はれて、しづかなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚なれ。」
 によって名譽や利益を求めることにあくせくして、平静な時をもつこと

なく、一生を苦しんでおくるのは「おろか」だと主張している。これが本段のテーマともなっている。

全体的にみると、冒頭のテーマを受けて、本段は、一般に、五段落に分けられるが、実際には冒頭の一文をテーマとみて、独立した一段落と見るほうが構成としては自然である。以下、②以下の各段落の冒頭部分と末尾部分を掲げることにより、本段の構造を簡略に示してみる。

①名利に使はれて、しづかなる暇なく、一生を苦しむこそ、愚なれ。
 ②財多ければ身を守るにまどし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。
 ③埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ、ひとへに高き官・位をのぞむも、次に愚かなり。

④智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらつら思へば、誉を愛するは人の聞きをよるこぶなり。是を願ふも、次に愚かなり。

⑤ただし、しひて智をもとめ、賢を願ふ人のために言はば、智恵出でては偽あり、才能は煩惱の増長せるなり。本より賢愚得失の境にをらざればなり。

⑥迷ひの心もちて名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。

※(注) 冒頭①と、最後の段落⑥のみ全文をあげた。

全体を簡潔にまとめると、①(第一段落)が、テーマで、「名(名誉)利(富貴)」を求める人間は「おろか」だと、述べ、以下その方向で記述が進められる。

②は、「利」を求めてあくせくするのは、一番「おろか」だとまとめる。

③は「名」を求めるのは、「利」を求める。次に「おろか」だとまとめる。つまり、①と、②③は連動しているわけであり、同じ「おろか」でも、利を求める「おろか」さが、名を求める「おろか」さに、「おろか」という点でまさっているという立場である。

④は、さらに「智恵と心」を求めることを批判する。テーマは、②で、まず「利」を求めることを否定し、次に③で「名」を求めることを否定し、④で、「利」と「名」の否定をうけ、さらに発展して「智恵と心」を否定しているのである。この場合の否定は「おろか」という言葉であり、「おろか」が多用されているのは、兼好の、人間の(行為の)判断に「おろか」という言葉が重要な位置をしめていることがうかがえる。

⑤は、「ただし」で始まるように、いわゆる第三段落までの補足にあたる。とくに、④の「智恵と心」の否定につき、中国思想を背景に記述している。

⑥は、本段のまとめにあたる。結局冒頭の一文を受けた流れの結論にあたるのは、「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」ということになる。

以上、本段の概要についてまとめた。

問題点は、おそらく数え上げたらきりはないのであろうが、今とくに問題(疑問)と感じられる点をあげておく。

①③まではわかりやすい構成であり、構造的には、とくに疑問を持つことはない。

①主題(名と利の否定) ↓ ②利の否定 ↓ ③名の否定という構造である。

それが④で一転する。起承転結、という構成からみれば、まさに「転」にあたる。

第一の問題点は、④の存在の意味である。主題(テーマ)から発展して、結論にあたる部分がうまく照応しないように見える例は、本書においてはよく見られることである。それこそが「つれづれなるままに」とあるごとく、兼好の本領であろうと思われる。つまり、主題からはずれて行く、よく言えば「連想の発展」というところに兼好の思考の本質があり、そこにこそ、注目しなくてはならないのだと、考えられる。

第二の問題点は、⑥の意図するところである。「迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくのごとし。」の「かくのごとし」とは何をさすのかということ。また、「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」は結論かどうかの確認ということ。

第三の問題点は、「おろか」という語の多用である。「おろか」は、本書でどのように使われ、どのような意味(価値)をもつのか、ということである。「おろか」の本書中の用例は全部で31例、本段にはそのうち、7例が存在する。4分の1近くが存在するわけで、これは重要視すべきである。また「おろか」と関わる語として、同類のもの(マイナス的なもの)は、「まどし」「わづらふ」「あぢきなし」「まどふ」「つたなし」「そしる」「やく(益)なし」「ぐ(愚)」「まよふ」などであり、反対のもの(プラスなもの)は、「あらまほし」「ほまれ」「ほむ」「けん(賢)」などである。これに「名利」「智恵と心」が関わってくる。

以上の疑問点を、関連させて、読み解き、説明することで、第三八段

の本書中での重要性がさらに明らかになるだろうという予測をもって、さらに論じていくことにする。

四 ④について

ここで、唐突に「智恵と心」が出てくるようであるが、兼好の思考回路にしてみれば、唐突なのではないのだろう。他者にはわからなくても、本人には本人の考え方があつたものだ。それをいささか論じてみたい。これはあくまでも推測なのだが、第一段との関連が深いように感じられるのである。第一段には、次のような表現が見られる。

「しな・かたちこそ生れつきたらめ、心はなか、賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち・心ざまよき人も、才なく成りぬれば、しなぐんだり、顔憎さげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるこそ、本意なきわざなれ。」

第一段の冒頭の一文は「いや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かれ。」である。要するに序段で「つれづれなるままに」書き出された本書が、まず取り上げたのが人間の願望についてなのである。前述引用部分の前には、「人間は容姿が望ましいが、教養のなさが見えたから、いくら容姿がすぐれていても艶消しだ」といった内容の表現があり、それを受けている。つまり「心」は賢くできるわけで、それが「才」となり、「才」があれば、自分にも容姿にも劣っていたとしても、決して彼らには劣らない、というより勝っているともいえる、ということが兼好の主張であつた。

④には「残さまほしき」「誉を愛する」「誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん」「是を願ふも、次に愚かなり。」と人間の願望に関わる言葉が多用されている。これはもちろん、④にかぎるわけではなく、種をあかせば、本段冒頭の「名利」の否定からして、第一段の否定の趣旨を大いに含んでいる、というより、第一段を否定することが本段の目的だからであると、ということなのだ。

だから「智恵と心」の突然の出現は兼好にとって何も唐突ではないということになる。「つらつら思へば」の「つらつら」のニュアンスは何か。それは、以前、第一段を記した時には「名利」に続き、「智恵と心」を肯定的にとらえていたが、よくよく考えてみると（つらつら思へば）、それは否定すべきものであった、ということであろう。

またその後の「ほむる人、そしる人、ともに世にとどまらず、伝へ聞かん人、又又すみやかに去るべし。」は、まさに第三〇段の「人のなきあそばかり悲しきはなし」の内容を受けているのである。

若きころの第一段を記した兼好は、願望の多い人間であった。それが、世の中の人に受け入れられず、次第に否定され、親しい人との別れなど、人生に失望して記したが、第三〇段と考えられる。兼好はそこでいったん筆をおく。そして第三二段からまた、心を入れ替えて、人生とむきあうようになる。人生には一時的に失望したが、見方を変えてみれば、まだまだ捨てたものではない、というのが、第三一段から、第三七段であった。すでに、これは、兼好の、第三八段から「復活」ととげる、「つなぎの段」と位置づけておいた。

五 ⑥について

⑥の冒頭「迷ひの心もちて名利の要を求むるに、かくのごとし。」は、⑤の「ただし」以下の、補足部分、つまり「名利」に加えて「智恵と心」を否定したが、それでも「智をもとめ、賢を願ふ人」について、直接的には、「智恵出でては偽あり、才能は煩惱の増長せるなり。」を指すものであり、間接的には、冒頭の「名利」の「名」を指すものと考えられる。老子や仏典を背景として、「かくのごとし」と述べているわけである。

「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」は⑤の「可・不可は一条なり。いかなるをか善といふ。まことの人は智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。」を受けている。

結局、①に始まった本段の意図は、第一段に始まる、若き日の兼好の、人生への願望の否定であり、「智恵と心」ですら、否定の対象であり、「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」と、まとめられたわけである。したがって最後の一文を結論と認定してよいと考えられる。

本段の構成は、次のように整理される。

①テーマ（「名利」の否定）↓②「利」の否定↓③「名」の否定↓④「智恵と心」の否定↓⑤「智」と「賢」の否定（④の繰り返し）↓⑥結論（新境地）（万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず）

これにより、第三八段が、兼好の新たな旅立ちとなったことへの確信がさらに深まったことになる。

六 本段の「おろか」について

第三の問題点は、本段における「おろか」の価値である。まずは本段の「おろか」について追及してみたい。」

1、名利に使はれて、しづかなるいとまなく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。

2、愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。

3、大きな車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人はうたて愚かなりとぞ見るべき

4、利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。

5、愚かにつたなき人も、家に生れ、時にあへば高き位にのぼり、おごりを極むるもあり。

6、ひとへに高き官・位をのぞむも、次に愚かなり。

7、身の後の名、残りてさらに益なし。是を願ふも、次に愚かなり。

以上について、それぞれ本段での「価値」について考えてみる。

1は、「名利に使はれて、しづかなるいとまなく、一生を苦しむる」ことを係助詞「こそ」で強調して、「愚かなれ」と評価している。もちろん、この一文は冒頭におかれ、適当な長さであり、「こそ」で強調していることから、全体の方向性を示す、主題や、もしくは提言とも言えるものとなっている。端的に言えば、名譽や利益に振り回されて、一生を苦しむことを「おろか」で否定しているわけである。

2は、「愚かなる人」であるので、評価が明確ではないが、「愚かなる

人の目をよろこばしむる楽しみ」について、「あぢきなし」と評価語を用いている点には注目したい。

3は、「心あらん人」が、「愚かなる人」の「大きな車、肥えたる馬、金玉のかざり」を好むことについて「愚かなり」と評価している。「愚かなる人」の対照的な存在が「心あらん人」である点には注目したい。

4は、「利に惑ふ」人について、「すぐれて愚かなる」人、と評価している。「すぐれて」という修飾語がついているので、もつとも「おろか」なのは「利」をもとめることと、兼好が考えていたことがわかる。

5は、「愚かにつたなき人」とあるので、評価が明確ではないが、「つたなし」という評価語に接続している点には注目したい。「おろか」と「つたなし」を関連語として兼好がとらえていることがうかがえるからである。この表現は、直前の「位高く、やんごとなき」と対照的である点にも注目したい。

6は、「ひとへに高き官・位をのぞむ」ことについて「次に愚かなり」と評価している。つまり「利」の次に「おろか」なのが、「名」であるという位置づけである。

7は、「智慧と心」を求めることが「次に愚かなり」としている。つまり「おろか」の中ではもつとも「おろか」さが低いという位置づけである。

七 他の段の「おろか」について

8、人の心はおろかなる物かな。匂ひなどはかりのものなるに、しばらく

く衣裳に薰物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。(第八段)

9、ただ、かのまどひのひとつやめがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、かはる所なしとみゆる。(第九段)

10、我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて物見て日を暮らす、愚かなる事はなほまさりたるものを(第四一段)

11、(10を受けて)前なる人ども、「誠にさにこそひけれ。尤も愚かに候」(第四一段)

12、愚かなる人は、またこれを悲しむ。常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。(第七四段)

13、されど、おろかなるおのれが道よりは、なほ人に思ひ侮られぬべし。(第八〇段)

14、おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは尋常なり。至りて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見て、是を憎む。(第八五段)

15、その日言ひたりしこと、したりしこと、かなはず、得たりし物は失ひつ、企てたりし事ならずと言ふ、愚かなり。(第九一段)

16、わづかに二つの矢、師の前にてひとつをおろかにせんと思はんや。(第九二段)

17、存命の喜び、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この喜びを忘れて、いたづがはしく外の樂しびを求め、この財を忘れて、危ふく他の財をむさぼるには、志、満つ事なし。(第九三段)

18、寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。(第一〇八段)

19、愚かにして怠る人のために言はば、一錢軽しといへども、是をかさぬれば、貧しき人を富める人となす。(第一〇八段)

20、その余りの暇幾ばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事を言ひ、無益の事を思惟して時を移すのみならず、日を消し、月を互りて、一生を送る、尤も愚かなり。(第一〇八段)

21、唐土船のたやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所狭く渡しても来る、いと愚かなり。(第一二〇段)

22、詩歌にたくみに、糸竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて余を治むる事、漸く愚かなるに似たり。(第一二二段)

23、無益の事をなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事する人とも言ふべし。(第一二三段)

24、かたちみにくけれども知らず、心の愚かなるをも知らず、(第一三四段)

25、行ひおろかなりと知らば、なんぞ茲を念ふこと茲にあらざる。(第一三四段)

26、愚かなる人は、あやしく異なる相を語りつけ、言ひし言葉も、ふるまひも、おのれが好むかたにほめなすこそ、(第一四三段)

27、風にあたり、湿にふして病を神靈に訴ふるは、愚かなる人なり。(第一七一一段)

28、愚かなる人といふとも、賢き人の心に劣らんや。(第一七四段)

29、芸能・所作のみにあらず、大方のふるまひ・心づかひも、愚かにし

て慎めるは得の本なり。(第一八七段)

30、かしこき人の、この芸におろかなるを見て、己が智に及ばずと定めて、(第一九三段)

31、万の事は頼むべからず。愚かなる人は、深くものを頼むゆゑに、恨み怒る事あり。(第二二一段)

以上の例について検証していく。まず8から。

8、人の心はおろかなる物かな。匂ひなどはかりのものなるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。(第八段)

この場合、「人の心」とは「男心」である。その男心とは、女の薰物のおおりに「必ず心ときめきする」ことであり、女色に迷う男性を「おろか」と評価している。

9、ただ、かのまどひのひとつやめがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、かはる所なしとみゆる。(第九段)

「まどひ」とは、女色による「まどひ」なのであるが、それは人間(とくに男性)は皆同じだ、という考えで、「智ある(男性)」も「愚かなる(男性)」も同じだという考えを述べる。ここでは、「おろか」と対照的な言葉が「智」だということがわかる。

10、我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて物見て日を

暮らす、愚かなる事はなほまさりたるものを(第四一段)

いつ死ぬかわからないのに、「競馬」などをみて一日をすごすことについて、「おろか」と評価している。この場合、「無常(死)」と関連する。

11、(10を受けて)前なる人ども、「誠にさにこそひけれ。尤も愚か候」(第四一段)

これは前例を受けている。作者に前記10を言われた人々がそのとおりと納得して「おろか」と考えたもの。もちろん「無常(死)」と関連する。

12、愚かなる人は、またこれを悲しむ。常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。(第七四段)

「これを」の「これ」は「老い」と「死」を指している。「老いと死」は人間を含めあらゆるものに存在するものなのに、それをわからず、悲しむことについて「おろか」と考えている。これも「無常(死)」と関連する。「常住」は「無常」と対照的な言葉である。

13、されど、おろかなるおのれが道よりは、なほ人に思ひ侮られぬべし。(第八〇段)

「おのれが道」とは僧侶なら「仏道」、武士なら「武士道」のことをさす。その本分をさておいて、僧侶が武士道に、武士が仏道に興味を抱いたりすることを、「人に思ひ侮られぬべし」と否定している。この段の冒頭は「人ごとに、我が身にうとき事をのみぞ好める。」とあり、「おろか」

は「うとし」との関連語と考えられる。

14、おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは尋常なり。至りて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見て、是を憎む。(第八五段)

「人の賢を見てうらやむ」のは「尋常」であるが、「至りて愚かなる人」は、それを「憎む」と考える。「うらやむ」よりは「憎む」ほうが強く、また、「うらやむ」のは「尋常」だが、「憎む」のは「至りて愚かなる人」と考えている。また、「賢」が対照的な言葉として使われている。

15、その日言ひたりしこと、したりしこと、かなはず、得たりし物は失ひつ、企てたりし事ならずと言ふ、愚かなり。(第九一段)

「その日」とは「赤舌日」(万事に凶である日)のことで、それを、「迷信」と言い切り、それを信じる人を「おろか」と断定する。この後に「無常変易の境、有りと見るものも存せず、始めある事も終りなし。志は遂げず、望みは絶えず。人の心不定なり。物皆幻化なり。何事か暫くも住する。」と記されている。「無常」と「不定」が出てくるように、この「おろか」も「無常」と関連して使われている。段末では「吉凶は人によりて、日によらず。」と迷信を完全に否定している。

16、わづかに二つの矢、師の前にてひとつをおろかに思はんや。

(第九二段)

矢を射る時に、「師の前」では一本も「おろかに」しようと思うわけがないということ。この場合、「おろか」は「いい加減」の意味として使われている。

17、存命の喜び、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この樂しびを忘れて、いたづがはしく外の樂しびを求め、この財を忘れて、危ふく他の財をむさぼるには、志、満つ事なし。(第九三段)

この部分の直前には「人、死を憎まば、生を愛すべし。」とある。また後には「人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。」などと記されている。ここの「おろか」も「無常(死)」と関連して使われている。

18、寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。(第一〇八段)

「寸陰」とは短い時間である。短い時間を惜しむ人はいないが、それは物事をよくわかっている人なのか、わかっていない人なのか、という意味である。「おろか」の対照として「知れる」が使われている。後に、「刹那覚えずといへども、これを運びてやまされば、命を終る期、忽ちに至る。」とある。「刹那」は「寸陰」と同じ意。短い時間も重ねれば、あつという間に死に至ると主張している。さらにその後「道人は、遠く日月を惜しむべからず。ただ今の一念、むなしく過ぐる事を惜しむべし。」と書かれており、「愚かなる」の対極に「道人」があり、これも「無常」とかかわっている。

19、愚かにして怠る人のために言はば、一錢軽しといへども、是をかきぬれば、貧しき人を富める人となす。(第一〇八段)

18と同一段である。18の直後に存在する一文である。「一円を笑うものは一円に泣く」の類。「一瞬を怠る者は、一瞬に泣く」といったところか。ここでは「怠る」が関連語となっている。もちろん「無常」が関連している。

20、その余りの暇幾ばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事を言ひ、無益の事を思惟して時を移すのみならず、日を消し、月を互りて、一生を送る、尤も愚かなり。(第一〇八段)

19と同一段である。したがって「おろか」の主旨の根底は同じと考えられる。無駄なことをして、一生を過ごすのは、一番「おろか」だと断定している。もちろん「無常」が関連している。

21、唐土船のたやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所狭く渡しても来る、いと愚かなり。(第一二〇段)

「唐」から、船など使って「無用の物ども」ばかり、困難を乗り越えてまで輸入するのは「おろか」だと述べている。これは馬鹿な、無意味な行為だ、という意味で、「無常」とは関係がない。

22、詩歌にたくみに、糸竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて余を治むる事、漸く愚かなるに似

たり。(第一二二段)

「詩歌」「糸竹」にすぐれている、つまり「幽玄」については「君臣」は重視するが、今の世では政治に役立たない。それをすることが「おろか」と述べている。

23、無益の事をなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事する人とも言ふべし。(第一二三段)

22に続く段で関連がある。無駄なことをして、時間を過ごすのを「おろか」と述べている。「僻事」と同じような意味であることが、わかる。22とほぼ同じ意味である。

24、かたちみにくけれども知らず、心の愚かなるをも知らず、芸の拙きをも知らず、数ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道のいたらざるをも知らず、身の上の非を知らねば、まして外の誹りを知らず。(第一三四段)

「知らず」という表現が10回使われている。「おろか」は「心」とセツトになっている。「おろか」は、ここでは「心」の評価語である。「おろか」以外は「みにくし」「つたなし」「数ならず」「老いぬ」「(病の)「冒す」「(死の)近し」「(行ふ道の)いたらざる」「非」「誹り」などとマイナス表現が連続する。本段の末尾の一文は「命を終ふる大事、今ここに来れりと、たしかに知らざればなり。」となっている。したがって関連は薄い、が、「無常」につながる流れではある。

25、行ひおろかなりと知らば、なんぞ茲を念ふこと茲にあらざる。(第一三四段)

24と同一段。ここでは「おろか」は、「行ひ」とセットになっている。

これも24同様、最後の一文につながるので、「無常(死)」につながる流れではある。

26、愚かなる人は、あやしく異なる相を語りつけ、言ひし言葉も、ふるまひも、おのれが好むかたにほめなすこそ、(第一四三段)

本段の冒頭は、「人の終焉の有様のいみじかりし事など、人の語るを聞くに、ただ閑にして乱れずと言はば心にくかるべきを、」とあり、それにつながるのが26である。人の死を脚色するな、というのである。「おのれが好むかたにほめなし」するのが「おろか」ということになる。これは「無常(死)」と無関係である。

27、風にあたり、湿にふして病を神靈に訴ふるは、愚かなる人なり。(第一七一一段)

政治にかかわる段の一部である。政治に対する意見の比喻として用いられている。要するに、自分で病気になるような生活をしていて、病気になるから神に祈るのは「おろか」だというのである。これも「無常」と無関係。

28、愚かなる人といふとも、賢き犬の心に劣らんや。(第一七四段)

「愚かなる人」と「賢き犬」が対照的に用いられている。これは完全に「馬鹿な、劣っている」という意味で、「無常」とは無関係。

29、芸能・所作のみにあらず、大方のふるまひ・心づかひも、愚かにして慎めるは得の本なり。巧にしてほしきままなるは、失の本なり。(第一八七段)

世の中一般の、行動も気遣いも「おろか」で「慎める」は「得」の「本」だといひ、それと対照的に「巧」で「勝手なふるまひは」「失」の「本」だといひ。「おろか」はここではむしろほめ言葉となっている。これも「無常」とは無関係。

30、つたなき人の、暮うつ事ばかりにさとく巧なるは、かしこき人の、この芸におろかなるを見て、己が智に及ばずと定めて、万の道の匠、我が道を人の知らざるを見て、己すぐれたりと思はん事、大きな誤りなるべし。(第一九三段)

「つたなき人」が碁を打つことにおいて「かしこき人」よりうまいことから、自分のほうが「智」があると思うのは間違いだという内容である。「つたなき人」が「かしこき人」と対照的に使われている。この場合の「おろか」は単に「へた」の意味で、「無常」とは全く無関係である

31、万の事は頼むべからず。愚かなる人は、深くものを頼むゆゑに、恨

み怒る事あり。(第二一段)

あらゆることは、頼りにならない。「おろか」な人は、頼る気持ちがあるためにあてが外れたときに「恨み怒る」ことがあるというのである。これも「おろか」は「馬鹿」とか「考えの浅い」とかいう意味でつかわれている。これも「無常」とは無関係である。

以上第三八段以外の「おろか」を検証した。

八、結論

第三八段は、本文中、とくに重要な段であり、作者兼好の新しい旅立ち宣言(新しい価値観の確立)の段であるということは、すでに述べてきたのだが、本稿では、新たな観点から、その考えを補強し、またそこから「おろか」という評価語の重要性を指摘し、検討を加え、「おろか」の本書での価値についての一応の結論を導くにいたった。

一番目に、④の存在の意味について検討した。ここでの問題点は、「智恵と心」の出現が、冒頭①のテーマの流れ(筋道)から、はずれているのではないか、ということであった。実はその謎は「智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、」の「まほしきを」にあったのだ。まずは「まほし」であるが、これは俗に願望の助動詞などと呼ばれている。本段が新しい旅立ちとすれば、それは「いでやこの世に生れては、願はしかるべき事こそ多かれ。」に始まる第一段の否定でなくてはならない。第一段には「心はなか賢きより賢きにも、移さば移らざらん」

などがあり、「心」を肯定しているのである。「まほし」はそれを念頭に置き、それを接続助詞の「を」で、「つらつら思へば、誉を愛するは人の聞きをよるこぶなり。」へとつないでいく。この「つらつら」に、第一段の反省が込められていると見た。

二番目の問題点は、⑥が本段のまとめ(結論)となりうるか、という点であった。前半の一文、「迷ひの心もちて名利の要を求むるに、かくのごとし。」の「迷ひのこころ」とは、冒頭①の「名利に使はれて、しづかなるいとまなく、一生を苦しむる」ことを指すと考えると、納得がいく。大体「名利」という同一表現がそれを物語っている。「かくのごとし」の指示する内容がまた疑問であったが、これは直接的には、⑤の「智恵出でては偽あり、才能は煩惱の増長せるなり」を指し、間接的には、冒頭からの「おろか」にあたる部分を指していると考えたと、これも納得がいく。本段では、まず「利」を否定し、次に「名」を否定し、さらに「智恵と心」を否定し、⑥の後半の一文、「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」でまとめる。ここに「願ふにたらず」とあることが、遠く第一段の否定であり、近くは、①の冒頭の主題の肯定となることの証明でもある。補足となるが、⑤に「ほむる人、そしる人、ともに世にとどまらず、伝へ聞かん人、又又すみやかに去るべし。」とあるのは、第一部のまとめとなった第三〇段を受けていると考ええると、これも納得がいくのである。したがって⑥の最後の「万事」から始まる一文は、本段のまとめ(結論)であり、冒頭①の主題をしつかり受けて結論としていることが確認された。

三番目の「おろか」の価値であるが、単純に「よし」を意味するブラスの語彙に対して、「愚か」の意味で用いられる場合と、「無常」を前提に、「無常」の意識がなく漫然と人生を生きていることに対して「愚か」と用いられる場合があることが確認された。

本段の場合はすべて後者に当たると、本書中の他の例は、その両者がほぼ同等（やや前者が多い）に存在していた。ただ、後半にいくほど、「無常」と無関係に善悪の「悪」といった価値で用いられることは明確である。本書中31例の「おろか」のうち、7例が本段に集中していることは無視しがたい。「名利」を否定することとくに適した価値観をもっているだろうことは、確認できたが、本稿では、その確認にとどめておくことを述べて本稿のまとめとしたい。

九 補注

以下、各説を挙げ、簡単に考えを述べておく。(一)番号、傍線は筆者による。

1、「漢文訓読体によるこの段の表現には、兼好の強い主張がみられるが、(1) やや柔軟性に乏しい。おそらく、それは彼の(2) 到着点からでなく、やや観念的な高みから主張されているからではなからうか。」

(小学館『日本古典文学全集』頭注)

※(1)の「やや柔軟性に乏しい」とはどういうことか不明。また(2)の「到着点」の意味不明。(2)の「観念的な高み」も不明。これは注になっていない。

2、「本段は(3) 反常識的な批判的原理に立脚し、いわゆる(4) 価値の転換をめざして止まない。この(5) (第一段との) 差異は、わたくしの言う第一部と第二部との間に十一年という時間的距離のあることをもってしなければ、説明しがたい」ことのように思われるのである。(角川書店『徒然草全注釈』注釈)

※(3)の「反常識的な批判的原理」の「常識」は何を指すか不明。(4)の「価値の転換をめざして止まない」の「めざして止まない」の意味不明。(5)の「十一年」はともかく「時間的距離のある」ことには賛同したい。

3、「この段は、(6) 第一段の否定としての位置をしめている。」(右文書院『徒然草諸注集成』補説)

※(6)について、そのとおりであり、賛同したい。

4、「ここで兼好が問題視していることは、世間的に最も価値高いものとされ、(7) 現実において人間が最も希求してやまない「名利」の価値を完全に否定しているという逆転の論理である。」(桜楓社『徒然草研究と講読』講説)

※(7) 大体において賛成だが、「逆転の論理」の意味不明。

5、「右の第一段と本段(第三八段)との「才能」に対する作者の相違(らしきもの、と言いたい)について(8) 安良岡氏は、「わたくしの『思われる』(以下、2の文言の引用)と言われているが、いかがなものであろうか。思うに、その差異は同じ人間が、異なった精神的位相に立ったときの発想の差異である。(9) 両方とも同一の人間に共

存し得る考えとして少しも差支えない。(中略)第一段では煩惱の人間であつたが、第三八段に至つて一切否定の人間になつて悟り切つたのではない。依然としてわが才能を煩惱として悩む人間であるからこそ本段の立言があつた」(有精堂『徒然草講座 第二卷』第三八段)

※(8)は前記2の安良岡氏の、第一段と第三八段の記述に、「時間的距離」があることへの反論だが、安良岡氏の意見のほうを認めたい。

(9)について、納得しがたい。もしもこれが同一年齢における人間の考えとしたら、異常としか言えない。それほど主張に異なりがありすぎる。

6、「こうして第三八段は、究極の理想の生き方を追求していたはずだったにもかかわらず、(10)最後は不毛な地点に到達してしまい、これ以上一步も前に進めないような状況が出現してしまつている。(中略)第一段からの大きな流れに沿つて読んでみると、兼好が一貫して追求してきた「理想」についての段であることに気づかされるし、同時に、究極の理想を追い求めることが、結局は(11)『言ふに足らず、願ふに足らず』という八方塞がりの状況を招いていることにも気づかされる。(中略) いずれにしても、(12)今までの彼の生き方や価値観が、ここで壁にぶつかったということである。」(笠間書院『徒然草文化圏の生成と展開』執筆の転換点)

※(10)の「不毛な地点に到達」、(11)の「八方塞がりの状況」、(12)の「壁にぶつかった」は、いずれも承服しがたい。今後はこの考え方の対応で研究を進めることにしたい。